慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

<u> </u>	
Title	一八一九年とバルザックの青年群像
Sub Title	1819 et les jeunes personnages balzaciens
Author	西尾, 修(Nishio, Osamu)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1982
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.44, (1982. 12) ,p.98- 104
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	白井浩司教授記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00440001-0098

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

西尾

修

夏」がとり分け暑かったと語っている。舞台はパリ近郊のリラダンの森。そしてこの地をバルザックは熟知していた。(~) うな形で反映されているのか、バ われる。では、バルザックにとって格別に関心の深かったこの年「一八一九年」は、「人間喜劇」全体の中に、どのよ 十年の歳月を経て『さよなら』を執筆した頃になっても、よほど鮮明な形でバルザックの脳裏に刻まれていたものと思 った、そのリアルな筆致から推して、両親の反対を押し切って文筆家としての自立への方向を選んだこの年の記憶は、 ば、この年の夏の暑さはパリで経験されたものであろう。だが、いずれにしても、暑さの体験を読者に語りかけるとい には、ヴィルパリジに移った家族と離れて、単身パリのレディギエール街の屋根裏部屋での生活を始めていた。とすれ からである。では「一八一九年の夏」にバルザックがリラダンに居たかといえば、夏の極く初めに訪れただけで、八月 一八一七年から数年にわたって、父ベルナール・フランソワの友人の住むこの地で休暇をすごすのが習慣となっていた 一八三〇年五月から六月にかけて「モード」紙に掲載された短篇『さよなら』の中で、バルザックは「一八一九年の ルザックの世界に登場する青年群像を対象としながら、その点を追って行きたい。

代訴人デルヴィルは「人間喜劇」の中にあってビアンションと並ぶ高潔な人物として描かれているが、一八三〇年二

99 —

体が一八一九年周辺に定着されているわけではない。そして、文字通り一八一九年秋から冬にかけてのパリを舞台とし なった、 n ランベ た作品として、『ゴリオ爺さん』(一八三四年―三五年)と、『ルイ・ランベール』の増補部分『叔父への手紙』(「ルイ る。だが、これらは、 一八三三年)。父ギョームが破産の果に自殺し、 りの恋をも投げうって、 ば担保も保証人もなしで高額の貸付を受けて、売りに出ていた代訴人事務所を手に入れ、これが後の成功への出発点と 多感な青年ウジェーヌ・ド・ラスティニャックが、 ている。 また、 1 という挿話であるが、この予期せぬパトロンに激励されてデルヴィルが一本立ちしたのは一八一九年のことで ルの未刊の手紙」一八三五年)をあげなければならない。 二十五才の貧しい法学士デルヴィルは、 シャル ル・グランデが父の勧めでパリを発ってソーミュー どちらの場合も、 奴隷商人として異国の地へと旅立ったのも一八一九年のことである(『ウジェニー・グランデ』 一八一九年にパリ、 悲嘆に暮れる暇もなく、 先年来、 昨年来の地道な法律の研究に見切りをつけて、ひと夏帰省した折 隣人づき合いを深めていた老高利貸ゴプ あるいは地方に見られた挿話なのであって、 ル 家名再興のために財を求めて出発したのであ の叔父の許に寄食し、 ウジェ 七 ニーとのゆきづ 小説の背景全 か

月に「モード」紙に載り、二ヶ月後に「私生活情景」の一篇として上梓された『ゴプセック』

に、

か

れの独立

譚が

に、 あった。ここにラスティニャックの上層社会への第一歩が刻まれ、(3) 「教育」は完り、 ランベール』には語られていなかった主人公の一面、つまり、 叔母から無心した紹介状を胸に、パリ社交界の名流ボーセアン夫人の門を叩いたのは、一八一九年十一月のことで 冷徹な野心家への道筋が決断されるのである。一方、『叔父への手紙』によって、一八三二年版の ランベールのパリ滞在(一八一七―一九年) やがてゴリオの悲惨な死に立ち会いながら、 が 読者の 『ルイ か ħ

前

に明らかにされた。

四通からなる『手紙』の日付は一八一九年の九月から十一月二十五日とされているが、そこでラ

ンベ この早熟の哲学者はパリを去ったのだった。ゴリオの死んだ一八二〇年二月と時を相前後してブロアに帰郷したのであ 1 ル は、パリの現実、 思想界、 政界の混乱を激しく批判している。そして、この手紙を認めて程ない翌年の初頭、(5)

ランベールはともかくとして、当時の「あらゆる青年たちと親交を結んでいる」と性格づけられているラスティニャッ よりこの両者は、バルザックの世界にあって、互いにあまりにも遠い存在であったのだろうか。しかしながら、 出会った形跡は 同じ時期にパリの一隅で貧しい生活を送っていた二人の青年ラスティニャックとランベール。もちろん、この二人が 友人の 回想の中で語られ、そこでしか真の価値が明らかにされ得なかった「哲学研究」の主人公ランベ 「人間喜劇」には見当たらない。現実社会を逞ましく生きる「風俗研究」の中心人物ラスティニャッ ルル、 もと

情」を見出すことができる、とバルザックは陳べているが、(8) ク が? とができない」のだ、とされている。では、パリに「長く留まる」ことのできない「美しい魂」とは、具体的にはどん(5) たちは、 置かれた「パリの相貌」の中で、この「地獄」ともいうべきパリにさえ、まれにではあるが る中で野心家へと変貌を遂げる学生の心理と行動の一部始終を文章化しながらも、その一方では常に、ラスティニャ クとは対蹠的な人生観を有する青年たちの存在に関心を抱き続けていたに違いない。 なくとも作者バルザックは『ゴリオ爺さん』を構想し、一八一九年の秋から翌年の冬にかけてのパリでの生活を経験す 「峻厳な法則」に従がうことなく、 自らの人間関係の中に、 「孤独」を好むがゆえに、また「卑少にして皮相的な社会」に適合できないがゆえに、 ランベールの影を全く見ていなかった、と断定することもでき ない だ 「美しい魂」をもって生きる青年たちの存在に触れている。(9) 『ゴリオ爺さん』でも同様に、 すでに パリを支配する苛酷にして 『金色の眼の娘』 「真実の感情」、「高貴な友 そして、 そこに「長く留まるこ ろう。 そして少 の冒頭に

が ル な人物を指すのだろうか。 の 一 、整っていた、と考えられる。一方、『ゴリオ爺さん』は、(fi) 八三五年八月二十三日の「パリ評論」 面を創造したのではない その解答としてバ か に載った『叔父への手紙』は、 ルザ ックは、 『叔父への手紙』 同紙上の前年の十二月から同年の二月にわたって掲載され 同年の三月初めには起草され、 を構想し、 パリに生活したルイ・ 七月には

構成した を創造しながらも、 年三月に発表された断片的著作の中に、 時を同じくして書き始められ、 三月にヴェ にパリに生きながら、この野心家とは全く異質な、 次いで同年の十一月の「ヴォルール」紙に一部が発表され、 『海辺の悲劇』に、この青年哲学者は姿を見せる。 ルデ社から刊本として世に出たものである。 一八三二年にすでに創造していた作中人物としての やがて同じ「パリ評論」 パ リのサ 口 孤独で純粋な青年像が創造されたのである。 ンの列席者の一人としてのルイ・ランベールを見出す こと が 紙上に発表されたのであり、ここに、 つまり、 とすれば、 翌年一月にヴェルデ社から出た 『叔父への手紙』 『ゴリオ爺さん』 ル 1 ・ ラ シベ は 」 ル 『ゴリオ爺さん』 を制作し、 を 再登場人物として、 ラスティニ さかのぼって一八三四 「哲学研 ラステ が上梓されると 究 + 1 ックと同様 の 一篇を でき į, ッ か

こにラステ 「一八一九年のパリに生きる貧しい青年知識人」というテーマが、 ッ クとランベールの親近性が、 作品制作史的にも、 5 もし「人間喜劇」 かがえるのではないか。 の中に想定されるとすれ 一八三四 そ

に発展させるか、そのことがバルザックの念頭の片隅に常にあったと思われるのである。

な理想家ランベ かけて、 クは、 ラ ス ルザ テ 1 = 1 ックは一五年前のパリを舞台に借りて、 ャ ル の怒りと挫折を作品化した。 ッ クを創造すると同時に、 同じ地平から出発し、 人間を含めて事物のコントラストを小説化することを好んだバ 野心的実際家ラスティ しかも対蹠的な人生を選ぶランベールをこれに配 = ・ ツ ク の誕生を物語り、 |年から翌年に 他方で は純粋

ムとセ

ナークルの結社員との対立へと鮮明化されて行くのである。

けてから、ここでオペラ座の定席に現われるまでの約二年間のラスティニャックの行状は「人間喜劇」 るセナークルが活躍する舞台は一八二一年秋から翌年八月のパリである。そしてラスティニャックもまた、(3) ていないことに気付くのである。一八一九年の秋から翌年の冬にかけての『ゴリオ爺さん』の舞台から ンディとして同じ作品に姿を見せるのであるが、興味深いことに、ゴリオの埋葬を終えてニュシ(エム) かにされていない。さらに、より広く「人間喜劇」に生きる青年像を見るとき、一八二〇年のパリにはあまり触れられ セ ナーク ルの初代頭領ランベールは一八二○年初めにパリを去った。二代目の指導者ダニエル ンゲン邸の夜会に出 ・ダルテスを中心とす の中であまり定 『幻滅』 名うてのダ 第二部

けて、 は、 説が初めて世に出るのを見たのは一八二二年一月の『ビラーグの跡取り娘』の出版の際であった。 一八二〇年 の 空隙 こうした伝記上の事実に関連があるのだろうか。 バルザック発信の手紙は欠落している。このことと関係があるのか。 「バ ルザック書簡集」 によれば、 いずれにしろパリの青年知識人の生きる舞 一八二〇年から翌年の五月に か

台は、一八二〇年の空白を越えて、『幻滅』第二部の時節へと展開されて行くのである。

の世界へと時代が飛んでいるのである。バルザックは一八一九年に文筆家としての道を決断し、しかしながら自作の小

ン ス社会を背景とする作品だけでも全体の三割近くに達している。作者バルザックは、それだけ深い関心を王政復古期 「人間喜劇」 全体の中でも、 その半数近くの小説が王政復古期を舞台としているが、 とり分けルイ十八世治下のフラ

を手にして、「栄光と権力と財」に憧がれてパリに現われたのもこの年であり、(5) ていた。だが同じ頃パリを立ち去る者もあった。ルイ・ランベールであり、ディド兄弟印刷所に働いていたダヴィッド 時空間であったと考えられる。ラスティニャックが自らの道を決断し、 前半に寄せていたのである。さらに年代を絞れば、一八一九年周辺のパリはバルザックにとって、最も思い入れの強い エチエンヌ・ルーストーが、 前年にはエミール・ブロンデが上京し 自作の一篇の悲劇

セシャールである。 この両者の魂は、パリに留まって生きるには余りにも偉大であったのだろうか。 いずれにして

八三七年)等は、ここを出発点としてパリに定住する。一八一九年パリ。ここを結節点、転回点として、バルザックの 同様に高潔なる人格の青年たち、デルヴィル、ビアンション、アンセルム・ポピノー(『セザール・ビロトー』

源となり得たのである。 パリに生きる青年群像は動き出すのであり、 レディギエール街の時代は、そのまま自らの小説世界のダイナミズムの根

注

- (1) Adieu, La Comédie humaine, tome X. Pléiade, 1979, p. 974.
- (x) Gobseck, La C. H., t. II, Pléiade, 1976, pp. 979-983.
- (c) Le Père Goriot, Garnier, 1963, p. 42
- (4) Ibid., p. 283.
- (15) Louis Lambert, José Corti, 1954, pp. 125-137
- (6) Ibid., p. 121.
- (r) Préface à Une fille d'Eve (1839), La C. H., t. II, pp. 26:
- b) Histoire des Treize, Garnier, 1966, p. 371 et p.

- 9 Le Père Goriot, op. cit., p. 245 et p. 286.
- 10 Ibid., p. 286.
- Louis Lambert, La C. H., t. XI. Pléiade, 1980, p. 1484, note de Michel Lichtlé.
- $\widehat{12}$ $\widehat{13}$ $\widehat{\mathfrak{U}}$

H., t. XII, Pléiade, 1981, p. 776.

- Ibid., p. 184. Illusions perdues, Garnier, 1961, p. 229 et p. 537. Aventures administratives d'une idée heureuse, La C.
- Ibid., p. 210.

14